

# 学びの質で選抜する 中学・高校の入試の現状



(株)森上教育研究所  
森上展安

●PROFILE

1953年生まれ。早稲田大学法学部卒業。東京第一法律事務所勤務を経て都内で学習塾「ぶQ」を経営後、88年に株式会社森上教育研究所 (http://www.morigami.co.jp/) を設立した。中学受験、中高一貫の中等教育分野を対象とする調査・コンサルティング、講演、執筆等を行う。

## 合科型・科目型の出題が増える入試

「高校入試はどう変わりつつあるか」という点でまず取り上げるべきは、大学入試における英語の4技能評価を高校入試レベルで大胆に実施した大阪府の例だろう。昨年春から英語に関しては、外部テストのスコアを入試得点に換算して英語の入試得点とするか、英語の新タイプの入試問題(従来型を4技能評価に近づけたもの)を受験してこの得点を英語の得点とするか、得点の高いほうが採用される方式で、注目すべきはその外部テスト利用者が全体で1%に満たなかったが、公立トップクラスの文理学科設置10校がその64%を占めている、ということだ<sup>\*1</sup>。

その大阪府の他教科の入試についてはどうだったか。この点について以下に文京学院大学・清水公男教授に分析を示して頂いたのでご紹介したい<sup>\*2</sup>。

いずれも、問題文は難しくなく、各設問も普通の授業時に習ったことをベースに、論理的な思考力が問われているが、合科型・科目型の出題が増える傾向にある。

・国語

作文の新傾向として。自分の主張をデータ等で裏付けるものには合科型・科目型の出題傾向が見られる。

・数学

統計的な思考を必要とする「資料の整理」の問題で、やはり合科型・科目型の出題である。

・理科

計算問題は減少気味であるが、特定の事象の原因を考

察し、記述する問題が増加している。面白いのは、受験生が初めて目にする状況を設定し、必要な情報を与えて問題を解かせる「活用型問題」の出題である。普段の授業(実験)のなかで、「なぜその現象が起こるのか」について、暗記でなく理解する力を問う問題となっている。

・社会

問われている知識は授業の範囲内であるが、問題文の量が増え、しかも情報をきちんと読みとる力が問われている。グラフを読み解くには割合や縮尺等、小学校レベルの計算力が必要とされる。

清水教授によれば、従来型(「習得型」と呼ぶ)に加え、高校入試問題には10年前(特に2012年以降)より思考力、判断力、表現力を問う活用型の出題がなされてきたという。この活用型は、以下の3タイプにさらに分析される<sup>\*3</sup>。

1. 教科型:各教科・科目における知識・技能をそれぞれの文脈で適切に活用できるかを問う問題
2. 合教科・科目型:社会のグラフや資料読み取り問題で数学の知識を必要とする問題等
3. 総合型:環境の問題に関して、具体例を挙げながら環境問題と自分自身の関わりについて、自分の考えを書かせる問題。

出題傾向としては、推薦入試には上記3型が多かったが、1型と2型の出題も増えている。

実際、全国の公立高校入試問題にはこうした活用型の注目問題が出されており<sup>\*4</sup>、国語では、会話形式の出題は増加傾向で、哲学や科学をテーマにした文章が多く出題されている。社会では、グラフや資料は年々増加傾向。一部、英語ではグラフや資料の読み取りは定番、記述は

思考系問題が増加しているという。

こうして高校入試問題は既に変化しつつあるとはいえ、筆者が問い合わせができた多くの県教委の高校教育課もそうした流れは一概に強調していた。

その大阪府のお膝元である大阪府が水都国際中学・高等学校を来春開校する予定で、公設民営のIB認証校を標榜している。いわば探究学習が中心になる学校であるため、高校入試も英語は4技能、他4科目も活用型の問題が主になると思われる。大阪府立高校入試改革のさらに一歩先を行く学校だといえる。

大阪府はそもそも代表的な公立優位の県で、北野高等学校をはじめとする「文理」科設置の公立有力10校に4500人余りが志願し優秀な生徒を選抜。次いで偏差値55前後の地元有力公立高校がプライオリティを持ち、私立は「併願校」の位置づけである<sup>\*5</sup>。ただし変化の兆しもある。カトリックの女子校2校、香里ヌヴェール学院中学校・高等学校とアサンプション国際中学校高等学校が共学化して、21世紀型スキルの教育内容を全面的に訴求して2年、各々、在籍生が定員の半分の状況から定員充足まで大幅に改善した。両校の学習内容の指導に当たっている石川一郎・香里ヌヴェール学院長によれば「大阪の高校入試は、国立大学である京大・阪大・神戸大の8000人と私関関同立1万6000人の合格を目指す層において選抜が成り立っているが、もう5年もすれば少子化によりその層においても倍率は消滅する。これまでのような入試のための学習では早晩成り立たなくなる」と指摘する。また、大阪女学院中学校・高等学校もIBコースを新設して志願者を大きく伸ばし<sup>\*6</sup>、また京都では花園中学校・高等学校がスーパー禅コースという自前の国際的な資産を生かしたアプローチで急速に中学募集を伸ばしている。

## 首都圏では附属校人気軒並み上昇

その大阪をはじめとした関西圏でも既述した通り、有力私大の附属校人気は高いが、首都圏の高校入試でも早慶MARCH等の附属校人気軒並み上昇している。特に法政大学中学高等学校、明治大学付属中野高等学校、明

治大学付属中野八王子高等学校等は志願者及び倍率が急騰した。しかし、この層を併願する都立上位校の受験者数は当然高止まりとなっている<sup>\*7</sup>。高校入試に詳しい進学研究会・進士高男氏の仮説は意外なものだった。即ち、共学化に伴う入試改革で大規模な推薦利用者増となった桐蔭高等学校に合格した、従来ではMARCH付属を受験しなかった層が有名大付属に応募、あるいは1校から複数受験に切り替えた、と推理する。ここに象徴されるのは、活用型の大学入試に大胆にシフトした学校改革に伴う進学校・桐蔭高等学校の入試改革が、一方で、大学新入試制度の「迂回路」としての大学附属志望を刺激している構図だ。

実は首都圏、とりわけ東京は全国的に見て特別に私立の中学高校が多い。15歳人口の少子化が始まった1989年を境にして多くの東京私学は中学併設にシフトし、以来、東京の受験のメインストリームは中学である状況には変化はない。その中学受験で起こっているこの数年の変化も、しかし基本的には前記した高校入試事情と相似している。高校入試と異なり、中学入試は私学が主役のため、私学難関上位校の優位は変わらないが、この数年は有名大学付属の受験者数は目に見えて増加し、倍率も数年前と打って変わって3~4倍の高倍率に高止まりしており、学習院中等科、明治大学付属中野八王子中学校、香蘭女学校、青山学院横浜英和中学等は志願者が増えている。いずれも、高校入試において桐蔭高等学校と附属銘柄校とを併願してヘッジするのと同じで、系列大学にも進学でき、一定の有名大学進学実績のある半附属校という属性が支持を受けている構図だといえよう。

## 探究学習を軸に 進学実績を上げる学校が存在

一方で、大阪の香里ヌヴェール学院等の探求型、21世紀スキル型の学校の存在は大阪ではまだ小さな波だが、東京の中学入試では極めて大きな波となっている。その代表格は広尾学園中学校・高等学校であり、そのあまりの急難化を受けて、受け皿化している三田国際学園中学校・高等学校(広尾学園元理事長が学園長)が高い人気を得ていることに象徴される。ただこの十数年をみる



表1 全国の高校の募集学科・コース数 5カ年の推移

学科・コース	2018年 (9,698コード)		2017年 (9,750コード)		2016年 (9,764コード)		2015年 (9,775コード)		2014年 (9,764コード)	
	公立 6,216	私立 3,482	公立 6,276	私立 3,474	公立 6,304	私立 3,460	公立 6,328	私立 3,447	公立 6,366	私立 3,398
外国語・国際系	132	141	134	132	142	128	149	124	153	120
	273		266		270		273		273	
理数系	160	51	165	50	170	48	168	49	168	47
	211		215		218		217		215	
情報系・文理系	145	-	145	-	137	-	135	-	131	-
総合学科	317	-	314	-	319	-	315	-	311	-

※育伸社提供

と広尾学園がそうであるように、かつての募集不振校が新しい経営スタッフによって刷新された学校がここに来て出口実績が出て評価されてきたといえる。そのなかには、京都市立堀川高等学校と同時期に探究学習に取りかかった埼玉県の開智学園もあれば、宝仙学園中学校・高等学校理数インターのように、いち早く公立中高一貫校の適性検査ニーズを掬いとり、探究学習を軸に上位校並みの進学実績を出しているところもある。また、東京・神奈川の中学受験の前哨戦となっている栄東中学校、市川中学校の両校は、共学上位校の地位を固め数千人の受験生を集める人気校になっているが、栄東は早くからアクティブラーニング学習に取り組み、市川はリベラルアーツ教育に力を入れている。

また、特筆すべきはグローバル教育に力を入れている男子上位校の武蔵中学校、海城中学校の動きである。武蔵中学校は、武蔵学園として武蔵中高外も巻き込んでREDプログラムを、海城中学校はKSプロジェクトという新世代に向けたプロジェクトを数年前からはじめ、積極的に新風を入れている。また聖光学院高等学校、豊島岡女子学園高等学校等が新たにSSH指定校になり、大学の入学者選抜に向けて極めて活発な動きをしている。実は女子上位校の鷗友学園女子中学・高等学校、洗足学園中学高等学校、吉祥女子中学校・高等学校、大妻中学高等学校等が、新たな大学入試への対応に極めて積極的に、こうした中学受験の上位校のアグレッシブな動きが附属校人気の一方で底堅い上位進学校人気を支えている。ただし、リーマンショック以降、首都圏の中学受験

者数は2割方落ち込み、この数年は人口増と景気の横ばいが幸いして復調しつつあるものの、中学受験者数は一層上位志向を強め、中下位ランクは苦戦している。この状況はそのまま中学受験塾の生徒層にも反映しており、中下位校はこれまでの塾チャンネルを通じた中学募集に依存できなくなったが、そのことにより、従来の習得型の入試と異なる活用型の新入試が多く試みられるようになってきている。活用型の入試問題によって入学してきた生徒の特長は、いわゆる偏差値による冷却化がされていないため、いたって元気で、入学してから成長し、リーダーシップを発揮したり上位成績をとるケースも少なくないという。活用型の問題は、上位校では意欲的に出題されているが、中堅の学校においては習得型の入試問題がよく出題され、中堅ボリュームゾーンの学校では今のところ活用型の問題は出題されておらず傾向に変化がない。ただ、来年の入試に向けては、男子中堅校の巣鴨中学校、攻玉社中学校、鎌倉学園中学校、世田谷学園中学校等という習得型入試の代表のような学校や、文系志向が多いと思われてきた女子中堅校である品川女子学院中等部、普連土学園中学校、あるいは共学の明星学園中学校等で算数一科入試を実施するという流れがはじめており、これが活用型算数の本格的出題となる可能性もある。

### グローバル入試を帰国子女に限らず実施するケースも

なお、英語入試については、従来、一部の帰国子女入

試で行われていたところ、この数年、グローバル入試という名称等で必ずしも帰国子女に限らず一般入試の選択制として英語入試で行う学校が年々増加している。また帰国子女入試に新たに参入する学校もあって、選択的ではあるものの、中学入試における英語のウェイトは急速に高まっている。来年入試から慶應湘南藤沢中等部では英数国もしくは算国理社の選択制で英語入試を実施することが決まっており、上位校の一般入試では初めてのケースとなる。そしてそのレベルは、英語準一級クラスの問題設定であるようで、小学生もしくはそれ以前から何らかの英語環境にいた受験生を想定している。先行して選択制で実施している学校も何校もあり、いずれも同様の水準である。

さて、全国に目を転じると高校募集の大きなトレンドの変化も見とれる。

表1は全国の塾教材老舗 育伸社が調べた高校募集学科コース名変更の全国集計だ。私立では国際系が大きく増え、公立では理数系が減少する一方、情報・文理系が増加していることが分かる<sup>※8</sup>。特に2022年度に実施される新学習指導要領では「探究」の名前がついた6科目が新設され、あわせて「総合的な時間」も「総合的な探究の時間」に変更され、まさに「探究」が前面に出される。

この点で県下の山形東をはじめとする有力校6校に「探究科」と「探究コース」をこの4月に新設した山形県は特記すべきだろう。従来の普通科募集で1倍強であったのが、山形東で2.95倍になる等受験生の期待の大きさを示しているといえよう(表2)。

紙幅がないため北海道の札幌圏の入試だけ最後に触れておきたい。地元大手の進学塾 練成会グループ・佐藤英俊教務企画部長によれば、上位校志向が高まり札幌

表2 2018年公立高校難度別推定合格率

偏差値	60以上	59～55	54～50	49～45
北海道	75.3%	81.8%	84.7%	87.9%
山形	87.0%	91.7%	100.0%	95.4%
東京	61.3%	64.0%	68.4%	82.2%
大阪	76.6%	78.3%	77.1%	85.5%

※育伸社公開データを利用し小社責任で作成

南、札幌北、札幌西、札幌東の公立高校トップ4校の他、私立の札幌第一高等学校、札幌光星高等学校、北海高等学校、札幌日本大学高等学校、立命館慶祥高等学校の受験生が多く、各校は上位コースが充実してきているという。なお、中学受験では北嶺中学校が東大・難関医大への進学実績が高く、首都圏出張入試の人気も上昇している。市立札幌開成中等教育学校がSSH、SGH双方の指定校となり、IB認証校としてスタートしている。

実は育伸社の前記資料から各都県の偏差値別公立高校合格率を作成したところ、北海道の公立高上位校は75%。故に私学上位コースの充実ニーズがある。さらに言えば高知県を除く地方のほとんどは公立優位にありながらも、中堅公立高校の合格率は手元の試算によればほぼ80%台後半になった。まして都市部中心に就学支援金が手厚くなるに従い公立中位校は大阪、そして東京がそうであったように私立に生徒を奪われる状況にある。



さて、ここまで中学高校入試の現状の一端を記してきたが、今後急速に入試プレッシャーによる学力選抜は大半の学力レベルから形骸化し内実を失っていくはずだ。そのなかで立教大学・松本茂教授から、SGHでの静岡県立三島北高校の豊かな実践をみて、「この学業を修めた学力の質ならば(指定校推薦ではなくSGH修了者に対して)進学を保証したい」という趣旨の感想をうかがった。これまでのように機会費用ともいべき入試に膨大なコストをかけず、願わくば高等教育機関がSGHのような取り組みを通じて学力の質を支え、これを通じて進路を保証するという、社会学でいう「取り引き費用」をかけた接続方式に大きく転換していただくことを心から望みたい。(各県教委高校教育課及び富山育英センター、名進研、鯉城学園、英進館、土佐塾の先生方には取材のご協力を賜り記して感謝申し上げます。)



※1 開成教育グループ 入試情報室 学校・入試情報ブログより引用。  
<https://www.kaisei-group.co.jp/nyushiblog/highschool/28808.html>  
 ※2 入試問題の概要は2018年大阪府公立学校入試問題より。  
<https://resemom.jp/feature/public-highschool-exam/osaka/>  
 ※3 文科省高大接続特別部会第16回配付資料より。  
 ※4 詳しくは森上教育研究所ウェブサイト清水教授の分析を掲載予定。  
 ※5 COLUMPON 萩原渉氏、エデュケーションネットワーク藤川享氏による。  
 ※6 CLUMPON 萩原渉氏による。  
 ※7 ベネッセコーポレーション 浅野剛氏による。  
 ※8 育伸社WEBサイト「入試情報最前線」<https://www.ikushin.co.jp/school/>より。